

「学際的研究」で損すること、 得すること

竹 沢 泰 子

数年前、アメリカ東海岸のある名門大学で開催された研究セミナーに、一聴衆として参加した時のことである。その日のテーマは「学際的研究」で、壇上に並んだ教授陣がその是非について順番に見解を述べるという企画であった。通常は、一人二人は違った見解を発言するものだが、この日は驚いたことに、四名の登壇者全員が、学際的研究はしない方がいい、と若手研究者に諭すかのように次々と語ったのである。名門大ゆえに学問にも保守的なのかと少々違和感を覚えた。

日本の研究機関における共同研究の雛形を創ったといわれる人文科学研究所は、異分野の研究者が集い、互いの専門領域を超えて議論を交わす場として長い歴史を刻んできた。それが人文研の看板である。やや手垢のついた感はあるが、今日流に言うところ「学際的研究」あるいは「分野横断的研究」によって、何がもたらされ、一方でどのような困難を伴うのか、私なりの解釈でこの機会に整理してみたいと思う。

冒頭の事例は、個人研究を念頭においた見解であり、共同研究になると話が違う。しかしそれが抱える困難さは、共同研究と無縁というわけでもないだろう。「学際的研究」には華やかなイメージが付きまといがちだが、その蔭で各班長はそれなりの苦勞を強いられている。

専門の異なる研究者同士で前提となるものが異なり、議論が噛み合わないことは当然ながら生じうる。それは織り込み済みだ。それ以外で、研究成果を論文集等で発表する時、学際的研究であるがゆえに「損をする」と毎回のように思ってしまう。その一つの例が学会誌の書評である。書評は相手が勝手に企画してくれることもあるが、制度的にこちらが依頼して初めて扱われる学会も存在する。ところが学会誌によっては、執筆者の〇分の△以上が学会員であること、といった規定が設けられており、学会誌以外の学術雑誌であっても、〃学、あるいは〃地域研究だけではないので、という理由で除外される場合もある。もちろん学際的研究を誇る学会に加入すればいいのだが、得てして歴史が浅く、また学際的研究の方向性自体も少し異なる気がして、私の場合、これまで躊躇してきたという経緯がある。同様に、単一会学会内での評価に関しても、二、三のディスプレイにとどまる場合と、より広範囲

な学際的研究に取り組み場合とでは、評価の強弱も異なるだろう。

また単著や共著の成果を国際学術雑誌で発表したい時も、学際的研究であるがゆえに、その査読で苦労する場合がある。ハードル以前に、そもそもゴールへとつながる入口を見つけ出すこと自体が容易ではない。たとえば問題設定や理論的貢献が文化人類学や社会学にあり、自身が歴史学的研究であれば、歴史学の雑誌では一次資料を使っていないという理由で、人類学や社会学の雑誌では現代を直接扱っていないという理由で、雑誌の性格に合わないとみなされがちだ。これが既存のディシプリンや地域研究内に収まる内容であればまったく違う話ではないだろうか。

しかしこうした軽くはないハンディを抱えながらも、学際的研究に対してそれなりの評価が定着しているのは、それを越える「得すること」があるからだろう。その一番の醍醐味は、ディシプリンの融合や連携から新しい学問や研究テーマが拓かれることにあるのではないか。

たとえば、人種研では、被差別部落も日本において人種化されてきた集団の一つであると定義して積極的に扱ってきた。この間の過程において、人種表象で論文集を編んだ際には、近代部落史の研究者が映画『橋

のない川』での部落表象を取り上げ、歴史資料を追いながら、それが招いた論争とその時代的社会的背景を丹念に読み解いた。それに触発された映画研究者が、可視性と不可視性をテーマとした次の論文集において、初めて被差別部落の映画に挑んだ。『破壊』や『橋のない川』における監督や俳優の立場性^{ポジションリィ}、「見えない人種」の表象ゆえの困難さなど、新しい視点がその論者によってもたらされた。また社会運動が元来の専門家だった別の部落史研究家は、人種研の科学史や自然人類学者らとの対話も参考にして、被差別部落に対する優生学的性質を帯びた社会事業について論文を寄稿してくれた。いずれもそれまでの部落史研究や映画研究、科学史研究には存在しなかった新しい成果である。

昨年一二月に開催した日系ディアスポラ・アートの関する国際シンポジウムにおいても、アートとトランスナショナルリズム研究や移民研究の出会いによって新鮮で先端的な議論が誕生した。「マイナー・トランスナショナルリズム」という国民国家をまたぐ越境移民たち同士のあるいは他のマイノリティとのヨコの関係性を、主流派集団と少数派集団というタテの関係性よりも重視するこの新しい概念をアートの当てはめた場合、何が見えるかを日・米・伯（沖縄系・韓国系を含む）の研究者らで論じ合った。あるコメンテーターによる

と、美術史ではこれまでまったく扱われてこなかったテーマだという。日系移民のアーティストたちが、移住先で先住民やアフリカ系、他のアジア系移民や南米系移民たちと遭遇したことで、どのような新しいアーートを創造したのか、概念を援用させることで先鋭化して浮かび上がったように思う。

こうして研究班のなかの多種多様なプロジェクトをお世話する私は、学際的研究によって、さまざまな学問の旅をさせてもらっている。すべてに通底する根源的な問いは、人間の分類をめぐるものであり、それは文化人類学の真髄だと思っている。非力の私には到底手に追えない問いではあるが、それでも旅先々での出会いから、新しい旅路の発見につながる活力を得ている。

